

論文の内容の要旨

論文題目

エーリッヒ・フロムの「自己実現」思想及びその人間観についての哲学的研究
—— 教育人間学における政治の問題を考えるために ——

氏 名 関 根 宏 朗

本研究は二〇世紀を代表する社会心理学者、エーリッヒ・フロム (Erich Fromm 1900-1980) の思考を対象とした、教育思想研究である。

半世紀以上にもわたり臨床的な精神分析を続けたフロムは、よく知られているように、その仕事において人間の「愛」や「希望」の重要性を宣揚し続けた。しかしフロムは同様に、一時期フランクフルト社会研究所に所属し人間の理性を舌鋒鋭く糾弾していたというキャリアも持っている。この意味を十分に認識し、よく知られた素朴なヒューマニストたるフロム像の理解を刷新すること、さらに言えば教育学分野におけるフロム研究——いわゆる「自己実現」論——をフロム思想が本来持っていたはずの奥行きとともに人間学的に捉え返すこと、以上が本研究の見通しである。

序章では研究目的を、第一に思想研究として、そして第二に教育学研究として、二つの点で提示する。さらに全体としての論文の構成を示し、本論の記述の概要を簡潔に述べる。

第 I 部「フロムとフランクフルト学派」では戦前・戦後における批判理論とフロムとの直接的なかかわりについて取り上げる。批判理論の思想はいかにフロムを規定し、また規定しなかったのか。その後のいわゆる「自己実現」論の問題設定に、フランクフルト学派の批判的問題設定はどのような刻印を残したのか。こうした問いについて第一章と第二章

で考察を展開する。

第一章ではフロムがいわゆる批判理論に思想的なルーツを持つという事実を確認するとともにその特有のフロイト理解を整理し、フロムの人間観、社会観におけるいくつかの前提を把握することを目的とする。具体的な記述においては、まず戦前のフロムと社会研究所との関係性およびその影響を概観したうえで、フロイト受容に即しつつその独自性——自我を相互行為へと拡大させ、また本能理論を脱性愛的に修正していたという事実——を確認する。さらに戦後日本を代表する教育人間学者、森昭のフロム理解を介して、その批判的人間形成論としての理論可能性の素描を行なう。

続く第二章では第二次世界大戦後のフロムと批判理論とのほぼ唯一の接点であるフロム・マルクーゼ論争の再検討を通して、ひきつづき批判理論との関係においてフロムの人間学の特徴を整理していく。当該論争において交わされた論点を明確化するとともに、そうした論争を経て断絶に至ったと思われるこの二人がじつはある一定の和解をしていたという論点を提示し、これを検証するため、一九六〇年代の熱い政治の季節を背景にフロムとマルクーゼとが具体的な「出来事」へとどのように向き合っていたのか検討を加える。そのうえで学派離脱後もなお批判理論における〈理論—実践〉観がたしかに堅持されていたことを示す。

第Ⅱ部「自己実現の論理」では、フロムがそうした批判理論の独自の継承をふまえて採用した方法論に注目し、その構造と傾向性について分析を加える。さまざまな分野を横断して独自の人間学を構築したフロムは、そこで人間＝社会の望ましい「自己実現 (self-realization)」モデルを掲げて倫理的な強調を付していたが、しかししばしば批判的に指摘されるようにその抽象度は高く、理論的な内実については今ひとつ分りにくいところがあった。本部第三章から第五章にかけてはこうした分りにくさに隠されたその理論的内実を解明するために、フロムの採用した方法論を切り口に考察を行なっていく。

第三章ではフロムの仕事において頻出する「技 (art)」という方法論的概念を取り上げ、先行する研究の論点を整理したうえで、いくつかの関連テキストから概念の意味づけを確認する。とくにその遺稿から最晩年に当概念の再定義が行われていた事実をふまえるとともに、これに派生するものとして提出されていた「アーティスト (artist)」たる表象へと目を向ける。そこで示された学びの発達・変容プロセスについての説明は、主知主義的な「従来」の精神分析的な理解とは一線を画したものとして描写される。

こうした「技 (art)」のきわめて重要なひとつに、最晩年にフロムが自らのそれまでの

思想をふりかえって総括的に提出した「在ることの技 (the art of being)」という視座がある。第四章ではこの「在ること (being)」に注目し、これをその対概念たる「持つこと (having)」との動的連関のうちに読み解いていく。論述においては、まず「在ること」と「持つこと」に代表されるフロムの二分法の問題把握が一見単純なその構造ゆえに多くの批判を招いていた事実を確認し、教育学分野においてもそれが同様であったことを俯瞰する。そのうえで、にもかかわらずそこには単純な二分法には収まりきらない理論可能性があるという仮説を提起し、フロムの初期マルクスへの参照をふまえることで、この動的連関の存在を論理的に検証する。検証の過程で浮かび上がった「結びつき」たる関係性のなかでの学びとでもいうようなフロムの独特な人間形成観が持つ、教育学的な意義と課題も合わせて提示する。

そしてこうした意義をより直接的に実践レベルで考察するのが第五章である。フロム自身「教育の問題はこの点にかかっている」と言明していた「権威」の問題を軸に、その自他関係——さらには教育関係——の理解を明らかにする。教育における権威が従来どのように語られてきたのか概括的にふまえつつ、『自由からの逃走』およびその続編『人間自身のための人間』をメインテキストとしてフロムによる「権威」関係一般にたいする説明を追跡的に描出し、その問題点およびオリジナリティを提示する。また前章までの知見を合わせて、その関係性についてのフロムの説明を再構造化して捉えていく。

以上の第Ⅱ部の考察を通して解明を目指すのは、フロムの言う「自己実現」が決して自己主体のみの本来性の実現というわけではなくて、〈自己—他者—社会〉という位相のうちの自己変容過程として捉えられていたという事実である。第Ⅲ部ではこうした関係性を内側から支えまた創りだしているものとして、能動性、愛、そして悪というフロムの各論的な仕事において提出された諸概念へと目を向ける。

まず第六章では「活動性／能動性 (activity)」を問題化する。いわゆる自己実現論の主唱者のひとりとしてフロムは各人の自律的なふるまいを顕揚していると理解されることが多いけれども、しかしフロムがその際に掲げた「活動性／能動性」という概念には、単純に「活動性」や「能動性」イコール個人主体の自律的態度と一言で置きかえてしまうことを許さないような意味の揺れが含まれていた。ここではその語義的な確認をふまえつつ、品詞をずらしてフロムがその精神分析理論において用いていた「活性化 (activating)」という語へと目を転じ、再度その「活動性／能動性」の関係論的なあらわれを試考する。またこの「活性化」という概念がそれ自体もっている教育学的可能性についても強調を行なう。

そして第七章では『愛することの技 (art)』のなかで示された「愛」およびそこに重要な構成素として含まれる「ケア (care)」についてのフロムの思考を検討の対象とする。考察の補助線に据えるのは、近年分野を超えて流行しているケアリング論の視点である。記述にあたってはまずフロムの思想と広義のケアリング論とのかかわりについての先行研究を概括しその問題点を確認するとともに、フェミニズム内からケアリング論に対し保守的な反動ではないかとの批判が行われている現在の状況を検討する。そしてフロムの思想における「ケア」が父性と母性の結びつきを単位に形成されているという点でそれらの批判への一つの応答可能性を提供しているということ、セクシュアリティおよび「愛」についての側面から考察する。また系統発生的な神話理解を個体発生の文脈に置き換えるフロムの手法をあらためて確認し、フロム独自の「ケア」——とくに「父性的ケア」というユニークな概念が持つ関係論的、人間形成論的な可能性について展望する。

各論の最後として第八章では、フロム自身によって『愛することの技 (art)』と「一対をなすもの」のものと位置づけられていた「悪 (evil)」についての仕事に注目する。その理念型的手法において究極的な根源悪とでも呼ぶべき純粋な〈悪〉を指定していたフロムの公共思想を理解するために、『人間の精神』から三つの運動性をともなった〈悪〉の要素にかかる記述を整理し、また「公共性」についての代表的論者であるハーバーマスとアレントの思考の前提も参照しつつ、ナルチシズムがその軸に据えられた〈悪〉の実態を解明する。〈自己—他者〉における論理が〈自己・他者—社会〉の論理へと広がりゆくその構造性をテキストから確認し、そうした〈悪〉に対抗すべくフロムが一九六〇年代に打ち出していたユニークな民主的教育計画について理論的な検討を加える。

以上のフロム読解をふまえつつ終章では、序章で展望した「教育人間学の政治化」の可能性について再度たちかえり、総括的に考察を行なう。第一章から第八章までの記述で検討を加えてきたフロムの思想をたしかな連続性をもったものとして再度ひとつのまとまりのもとに振り返るとともに、日本の教育人間学に大きな道筋をつくった森昭による政治と教育との螺旋関係についての初期論稿をふまえて、その説明可能性をフロムの「自己実現」論に見出す。そして合わせて教育人間学の今日的可能性を展望する。